

蛇くちなわに甘噛み

sample

鳳仙花

銀色を知らない

ミソギ・バイ・リビドー

蛇に甘噛み

あとがき

4

22

50

80

116

ミ
ソ
ギ
・
バ
イ
・
リ
ビ
ド
ー

sample

今回はアスワン近郊の遺跡にて、『教授』とその弟子である新人ハンターに随伴する任務であった。

『教授』とは既に顔馴染みで、彼は初老のイギリス人ハンターである。新人は少女といえる年齢で、『教授』には『ペイブ』と呼ばれていた。探索の様子も武器の扱いも堂に入ったものであったから、頼りなく思える異名は純粹に外見から来たものなのであろう。異名を持たない自分としては、新人ながらに異名を持つ彼女が少し羨ましくもあった。もともと『ペイブ』自身は、こんな異名ならない方がマシだと憤慨していたが。

だが、いかに実力があろうとも、未発達の身体で出来ることには限りがある。年配の男性と小柄な少女の二人組、その任務に呼ばれた理由は要するに護衛なのであろうと自分は理解していた。

だから秘宝の眠る部屋で罠が発動した時も、『ペイブ』を守ることに迷いは無かった。自分は左半身に呪詛を含んだ液体を浴びたが、被弾箇所が麻痺する呪いを受けただけで外傷は免れた。二人が無傷で、自分も銃さえ持てれば援護は可能だ。秘宝は無事に回収され、我々は数時間後にアスワン市内の拠点まで帰還することができた。

拠点である宿に戻った時、隊長が迎えてくれたのには驚いた。聞けば自分が呪詛を浴びた時点で協会と隊長に連絡が届いており、別件でルクソールを訪れていた隊長は車を飛ば

して駆けつけてくれたのだという。

呪詛を浴びてから数時間が経過し、鈍痛と異様な倦怠感が出てきていたが、変わらず右半身は動かせる。泣きそうな顔で何度も謝罪する《ベイブ》に大丈夫だと言い置き、自分は隊長の肩を借りて宿の自室に戻った。

隊長は呪いを受けた時の状況を聞き取りながら、手際よく拳銃やサバイバルナイフなどの武装を取り外してくれた。その作業が終わると全身を叩くようにボディチェックを行い、替えの銃弾や投擲武器の取り残しがないことを確認する。

「他に携帯している武器はない？」

「ないでありマスッ」

「了解」

隊長は頷くと、自分の左腕を取って立ち上がる。小柄な隊長とはかなりの体重差があるはずだが、重心の移動を利用して重い身体を持ち上げてしまう技術は見事と言う他ない。

隊長は自分の腰の後ろをしっかりと掴み、半ば引きずるようにしてバスルームへと向かう。そして自分は、そのままバスタブに放り込まれた。

「ウワッ……!!」

「ごめん、鼻に入っただ？」

「い、イエ、大丈夫でありマス……」

言葉の上では何とか取り繕ったが、既に聞かれてしまった悲鳴は誤魔化しようがない。だが着衣のままバスタブに放り込まれ、いきなり頭からシャワーをかけられれば、情けない声のひとつも出ようというものだ。

「ソノ、なぜ服のまま……」

「どうせ服も洗わないとでしょ」

確かに自分は血と泥と呪詛液まみれだが、せめて服は先に脱がせてほしかった。

湯を吸って重くなったBDUが全身に張り付き、半身の麻痺と倦怠感が相まって全く身動きが取れない。じつとりと生ぬるい温度のせいで、謎の生物に纏わり付かれて拘束されているような不快感がある。整髪料と汚れで固まっていた髪がしおれて額に張り付いた。

飼い主に洗われて虚空を見つめる犬の動画を見たことがあるが、おそらく今の自分はそういう顔をしているだろう。

強めのシャワーで雑に全身を洗い流され、赤黒く濁った湯がバスタブの底を流れて排水されていく。ざっと汚れが落ちたところで、隊長はようやく服に手を掛けてくれた。

だが、濡れた布地は重みと摩擦でなかなか体を離れない。隊長は狭いバスタブの中で自分を引っ張ったり抱えたり、何度も姿勢を変えながら器用に服を脱がせてくれた。

「……すごいね、これ」

防刃仕様のアンダーシャツを最後に引き剥がし、ようやく上半身が露わになったところで隊長が深刻そうに呟いた。

直接に液体を浴びた皮膚だけでなく、布で遮られていたはずの部分まで、肌が黒く変色している。ところどころに浮き上がる文字がなければ巨大な痣のようにも見えただろう。

左の上半身から左脚にかけて、麻痺して動かせない部分と完全に一致している。痺れと同時に肉を蝕まれているような痛みがあるが、耐えられないほどではなかった。

「症状は麻痺だけ？」

「少しデスガ、痛みも感じるでありマス」

「右側は動く？」

「ハイ、右半身は異常なしでありマス」

「分かった。砲介、バスタブの縁にしっかりと掴まってね」

隊長は真剣な眼差しで自分のボトムに手を掛けた。その指先はカーゴパンツだけでなく、下着のゴム部分もしっかりと掴んでいる。下着もろとも一気に引き下ろそうとしていると

気付いて、自分は慌てて隊長を制止した。

「ま、待ってくだサイッ!! そこは、ソノッ……」

「非常事態なんだから、そんなこと気にしなくても」

「自分は気にするでありマスッ!!」

確かに非常事態には違いないが、決して生命の危機などではないのだ。こんな至近距離で、隊長の目前に自身を晒す覚悟などできるわけがない。

「下着だけは残して欲しいでありマス……!」

「……分かった、砲介がそう言うなら」

隊長は渋々といった様子で頷くと、カーゴパンツのフロントボタンを外し、ファスナーを下ろした。それだけでも自分にとっては充分に危険だ。下着が脱げないようにと気遣われたせいで、逆に該当区域を丹念に触られる結果になってしまった。

そうでなくとも自分の服を脱がせるために、先程から抱き合うような姿勢での密着が頻発していたのだ。これ以上は局地的な非常事態に陥る危険がある。自分はできるだけ心を無にし、動かせる右手と右足を駆使して、迅速にカーゴパンツが脱げるようにと協力した。だが、本当の危機はこれからだった。何とか下着を死守して脱衣の共同作業を終え、安堵のため息をついたところで、今度は隊長が着ていた服を脱ぎ始めたのだ。

蛇くちなわに甘噛み

sample

隊長の細い指先が、頸動脈の上をゆっくりと滑る。たったそれだけで大げさに震える肩を隠しきれず、悪戯っぽく細められた瞳が眼前を掠めた。

「そんなに怖がらなくてもいいのに」

「……………」

感じているのは恐怖ではない。緊張や焦燥に近く、それでいて甘い期待を含む、浅ましい感情だ。そんなものを、隊長に気付かれるわけにはいかない。

「砲介」

大丈夫だよ、と耳元で囁かれる。ベルトの金具が擦れる音がする。体温の気配だけが首元を素通りし、続いて冷たい革の感触がうなじに触れた。呼吸と血の流れを容易に止められる急所を、硬い皮革が一周する。

弾丸を込める時と寸分違わぬ慣れた手付きで、ループに革の先端が差し込まれた。

自分は今、この人に、首輪を填められている。

「苦しくない？」

「…………だ、大丈夫でありマスッ…………」

思わず唾を飲み込むと、一際冷えた首輪のバックルに喉仏が触れ、また体を震わせてしまった。

「ごめん、少しきつそうだね」

ベルトの穴をずらすために首輪が前に引っ張られ、微かに首の側面が締まる。

「……………」

今度こそ明確に、薄暗い興奮が背筋を駆け上がるのが分かった。

世界で最も信頼する人の手に、命を握られている。この人がちょっとした気まぐれを起せば、自分は簡単に死んでしまうのだ。この瞬間、自分の命は、この人の所有物に他ならない。

それがどうしようもなく嬉しくて、満ち足りて、なのにその先が欲しくなる。

本を正せば、これは懲罰のはずだった。

任務を終えて帰還した我々は、メデイカルチェックのためにロゼッタ協会本部を訪れ、ちょっとしたトラブルに見舞われたのだ。

自分が全ての検査を終え、着替えてロビーに戻っても、隊長はなかなか姿を見せなかった。もっとも検査項目の違いで少し待たせることになるかもしれないとは事前に聞いていたから、自分は窓の外を眺めながら隊長が戻るのを待つことにした。すぐに戻ると分かっ

ているあの人を待つのは、むしろ楽しい時間ですらあった。

だがそこに話しかけてきたのが、聞き取りにくい英語を話す巻き毛の男だった。

クロウという名前は聞き取れたから、隊長の知り合いなのであろう。自分を隊長のパディだと知っていて、表面上は歓迎の挨拶をしてきているようだった。

だが人間の目は、言葉よりも雄弁に感情を語る。聞き取れない箇所があっても、こちらを馬鹿にしていることはすぐに理解できた。もつとも隊長からは『協会本部なんて墓荒らしどもの巣窟なんだから、変なのが来ても相手にしちゃだめだよ』と事前に念を押されている。不躰に自分のサングラスを取り上げ、動物に例えて揶揄してきたところまでは聞き流すことができた。

だが自分が挑発に乗らないと分かると、その男は隊長を侮辱してきたのだ。自分の知る限り最も下品な言葉と低俗なジェスチャー付きで。

気付いたら、その顔面に拳をめり込ませていた。

受付の女性が控えめな悲鳴を上げ、周囲が一瞬ざわついた。ロビーには警備員の姿もあったが、こちらを軽く一瞥しただけで介入しようという様子は全く無い。

男が倒れて開けた視界に、間に合わなかったと頭を抱える隊長の姿が見えた。